

グループ名 ・代表者名	せとうち市民放射能測定所 大塚 尚幹	助成金額	30万円
連絡先など	http://kodomomirai.org		
助成のテーマ	市民放射能測定所の開設		

【調査研究の概要】

・「せとうち市民放射能測定所」は、福島原発震災によって岡山県に避難してきた人たちと、地元の支援者による福島・東日本支援の市民グループとして2011年4月に立ち上げた。原発震災後、岡山県に避難してきた人は500名を超えるといわれている。

・岡山にも、食品や瓦礫その他を通じて、放射能が広がっている可能性があるが、行政による放射能測定は一般市民の要望に充分に応えるものではなく、子どもを持つ親たちの給食等への不安も解消されていないため、市民が食品や水、土壌などの放射能を自ら測定し、食べ物やライフスタイルを選択できるようにする必要性を痛感し、岡山でも市民放射能測定所を開設することにした。

【調査研究の経過】

・2012年3月11日、日本初の食品放射能測定車を始動。車に測定器(ATOMTEX社AT1320A)を積み、要望のある場所に出向いて測る。測定の電源は、車に積んだソーラーパネルとバッテリーである。

・中四国で唯一の市民放射能測定所として、岡山を中心に広島、香川、高知、滋賀、富山など広範囲に活動。これまで300検体以上を測定し、結果をHP等で発表してきた。

・現在は岡山、福山、高松市の数ヶ所で、月1回のペースで定期的に測定している。

【今後の展望など】

・これまで324検体を測定、うちセシウム134、137の反応があったのは7%24検体。

・反応例は、岡山産では紅茶とイノシシ肉のみ。他の地域では、静岡・埼玉の緑茶、九州の原木干シイタケなどの汚染が比較的高く、福島の山菜、生シイタケ、川魚は非常に高かった。

・セシウム137だけ出る検体があり、これは福島事故由来ではなく、核実験やチェルノブイリ事故等によるものと考えられる。福島事故前から、日本は放射能に汚染されていたことを再確認した。

・2012年12月に国立市の「こどもみらい測定所」と共同で、「東京の放射能測定でわかってきたコト」と題する講演会を開く。「汚染の現状がよくわかり、食品選びの判断材料になった」と好評。

・今後も中四国を中心に測定を続ける予定。測定結果の集積と分析、放射能情報の発信、各地での測定のサポートなども、引き続き行っていきたい。

会計報告書の概要 (金額単位:円)			充当した資金の内訳		
支出費目	内 訳	支出金額	高木基金の 助成金を充当	他の助成金 等を充当	自己資金
旅費		73,500			73,500
研修費		31,500			31,500
機材・備品費		2,100,000			2,100,000
印刷費		31,500			31,500
会議費		14,400			14,400
試験体購入費		0	300,000		60,000
合 計		2,610,900	300,000		2,310,900

調査研究・研修に関する一般向けの報告

放射能測定車が始動！

2012年3月11日、日本初の食品放射能測定車が岡山で始動した。名づけて「せとうち市民放射能測定所 放射能どこでも測り隊」。車に測定器(ATOMTEX社AT1320A)を積み、要望があればどこにでも出向いて測る。測定の電源は、車に積んだソーラーパネルとバッテリーである。

福島から遠く、安全と思われている岡山だが、汚染された食べ物は全国に拡散し、岡山にも来ているかもしれない。それを自分たちの手でチェックし、子どもたちに安心できる食べ物を！という思いから、市民測定所は始まった。



屋根にソーラーパネル300W バッテリー2kwh搭載



7%にセシウムの反応

以後1年あまり、この車は中四国で唯一の市民放射能測定所として、岡山を中心に広島、香川、高知、滋賀、富山などを走り回ってきた。その間、計324検体を測定し、うち7%24検体にセシウム134、137の反応があった(以下134、137と略。主な測定結果はHPに→<http://setouchi-lab.org/>)。

当初は検出限界値を10Bq/kgとし、それ以下はND(不検出)としていたが、会員の要望に応え、反応が少しでもあるものはその数値を表示し、反応がないものだけをNDとすることにした。ただし、器械の精度や1検体30分という時間制限のため、少量の放射能が含まれていても反応が出ないこともある。

岡山産で反応があったのは、紅茶(137:13.9±12.2Bq/kg、以下単位略、2013/3/5)とイノシシ肉(137:4.29±3.47、12/7/2)のみ。他は米、小麦、野菜、果物、キノコ、魚介、乳製品に至るまで、反応は出なかった。

一方、福島県川内村は、汚染が比較的少なく「帰村宣言」が出された地域だが、2013年4月8日に採ったものが異常に高い汚染値を示した。フキノトウ+ゼンマイ(134:476±110、137:867±197)、生シイタケ(166±37、310±69)、イワナ+ヤマメ(50.5±19.6、82.0±26.8)などである。ちなみに日本の食品の基準値は100Bq/kgである。

ペレットからも放射能

その他では、静岡産の緑茶(85.2±26.5、82.8±30.2、12/9/10)、広島の杉の葉(137:40.5±24.7、12/10/26~28)、福島県伊達市産のモモ(10.9±4.5、13.1±5.3、12/8/13)、九州産の原木干シイタケ(137:11.6±6.0、13/1/25)などが比較的高かった。

目を引くのはペレット(おがくずなどを圧縮成型した小粒の固形燃料)で、新潟+島根産(18.9±7.1、25.5±8.9、12/6/25)、ヨーロッパ産(137:10.4±4.4、12/6/5)から放射能が出た。前者は134と137の両方がほぼ同量なので、福島事故由来と思われるが、後者は137だけなので、核実験やチェルノブイリ事故由来と推測される。

134は半減期が2年と短いため、核実験やチェルノブイリ事故から年月がたつうちにほとんどなくなるが、半減期30年の137は長く残る。この1年あまりの測定でも、137だけが測定された検体はかなりあり、福島事故前から日本が放射能に汚染されていたことを再確認した。

測定話あれこれ

当測定所では、持ち込みの食品だけでなく、気になるものは予算で購入して測定している。1検体の測定料は2500円(会員2000円)だが、岡山、福山、高松市の店やグループに車を貸し出してまとめて測る場合は、1検体500~600円としている。収支はトントンである。

岡山へ避難している人からは、「1Bqたりとも体に入れたくないので、検出限界値をセシウム合計で1Bq/kgにしたい」という要望が多く寄せられた。時間をかけるほど検出限界値は下げられるが、当測定所は1日に数検体を測るため、1検体に30分程度しか時間をかけられず、この要望には応えられていない。

バックグラウンドについて

放射能の測定には、まずバックグラウンド(環境放射線)を測って、器械が調整できているか確認する必要がある。

当測定所は車で移動するため、移動した先で毎回バックグラウンドを測らなくてはならない。だいたい午前中に2時間ほどかけてバックグラウンドを測り、正午ころから食品の測定に入る。この

ため、1日に測定できるのは最大でも7～8検体である。また、雨が降るとバックグラウンドが変わるため、同じ場所でも天候に応じてバックグラウンドを測り直す必要がある。

鉛で囲われている測定器からセンサー部分を取り出して、空間線量を測ってみたことがある。地上ではカリウムが何万Bqも測定され、セシウムも若干の数値が出た。一方、海上(船上)で測ると、カリウムやセシウムはまったく反応せず、バックグラウンドは主に地面からの放射線であることがわかった。



船上での測定の様子 AT1320Aのセンサーを鉛のケースから取り出し、測定する。

今後の活動

2012年12月に国立市の「こどもみらい測定所」と共同で、「東京の放射能測定でわかってきたコト」と題する講演会を開いた。2つの測定所の代表が、それぞれ東京と岡山の測定結果を報告し、全体で情報共有と話し合いを行った。参加者には「汚染の現状がよくわかり、食品選びの判断材料になった」と好評だった。これからも他団体との協力を進めていきたい。

現在は岡山、高松、福山市の数ヵ所で、月1回のペースで定期的に放射能の測定をしている。「岡山で放射能を測ってくれるところ」として少しずつ認知度も上がり、地元のテレビや新聞に取り上げられたり、定期的に測りにくる個人やグループもいる。

当測定所は今後も、中四国を中心に放射能測定を続けていく予定である。測定結果の集積と分析、放射能情報の発信、各地での測定のサポート等も、引き続き行っていきたいと考えている。